

Title	光の美学 : R. グローステストと教父バシレイオスをめぐって
Sub Title	Aesthetics of light on Robert Grosseteste and St. Basil
Author	樋笠, 勝士(Hikasa, Katsushi)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.54 (2023. 3) ,p.179- 194
JaLC DOI	
Abstract	スコラ哲学者グローステストは、世界創造の際の「光あれ」の聖書解釈を通じて、「光の形而上学」をうちたてた。そこでは、彼は、動的作用的性質とその多化の働きを「光」に見だし、「光」が、一方では、霊的な性質に近いものの、他方では「物的形相性」でもあることで、創造による被造世界全体を同質的にとらえるに至った。これは新プラトン主義的な「光の一性と多性」の思想系譜に沿った解釈であり、その淵源は、彼にとっては教父であった。とくにバシレイオスには、被造界全体を価値づける「世界は美しい」の言説があり、これを、バシレイオスの「光あれ」解釈と共に受容することでグローステストは、世界肯定的な「光の形而上学/光の美学」を構築することにもなった。
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

光の美学

—R.グローステストと教父バシレイオスをめぐって—¹

樋 笠 勝 士

要旨

スコラ哲学者グローステストは、世界創造の際の「光あれ」の聖書解釈を通じて、「光の形而上学」をうちたてた。そこでは、彼は、動的作用的性質とその多化の働きを「光」に見だし、「光」が、一方では、霊的な性質に近いものの、他方では「物体的形相性」でもあることで、創造による被造世界全体を同質的にとらえるに至った。これは新プラトン主義的な「光の一性と多性」の思想系譜に沿った解釈であり、その淵源は、彼にとっては教父であった。とくにバシレイオスには、被造界全体を価値づける「世界は美しい」の言説があり、これを、バシレイオスの「光あれ」解釈と共に受容することでグローステストは、世界肯定的な「光の形而上学/光の美学」を構築することにもなった。

「光の形而上学」と「光の美学」との間には接点がある²。前者については、W.Beierwaltes³や、H.Blumenberg⁴が、パルメニデスやプラトンを源流として描いたように、真理としてあらわれる光の表象やその存在論的意味を問題に

-
- 1 本稿は、科学研究費基盤研究（B）課題番号19H01209「詩学的虚構論と複数世界論の交叉の研究」の研究成果であり、第264回京大中世哲学研究会（2020年12月）にて発表した際の草稿に手を入れたものである。
 - 2 参照：拙稿「光の形而上学/光の美学」（宮本久雄（篇）『光とカタチ-中世における美と知恵の相生』教友社、2020年所収）。
 - 3 W.Beierwaltes, *lux intelligibilis*, München, 1957.
 - 4 H.Blumenberg, *Licht als Metapher der Wahrheit.*,1957. 『光の形而上学』朝日出版社、1977年。

する。およそ認識論的には明るさとは認識の明確さであり、その分、真実さでもある。また存在論的には明るさとは存在そのもの、真実在をあらわす。他方、後者は、E.de Bruyne⁵が語るように、西洋中世の美術、とくに教会建築をめぐって、光を取り入れる作品の様式を、その根拠となる中世思想と共に探ろうとする文化史的問題意識をもつ。とくにゴシック教会建築においては、サンドニ教会の建築に携わった修道院長シュジュールに影響したであろうと目される擬ディオニシオス・アレオパギテスやフランシスコ会派のグローステストとの関連が論じられることもある。とりわけ、グローステストは「光の形而上学者」とも言われる以上、そこには形而上学と美学とのあいだに深い脈絡があるということになる。

さて、J.McEvoy⁶によれば、光の形而上学の代表的著作として知られるグローステストの『光について、すなわち諸形相の始まりについて (*de luce seu de inchoatione formarum*)⁷』が成立するまでに、光の初期思想が大きく働いているという。その中で大きな要因はHexaëmeronの解釈系譜である。創造の六日間を読み解く聖書解釈の営みは教父思想から連綿と続き、グローステストにまで至っている。彼の手元に届いた著作としては、バシレイオス(『ヘクサエメロン』)とアウグスティヌス(『創世記逐語解』)らの教父の存在が大きい。これらの権威に沿ってグローステストは、最初の光の創造に、存在論的意味を見いだすのではあるが、そのような形而上学的関心と共に、光そのものへの強い価値意識も感じられるのである。それを端的に表すのは、彼が言う「光は美しい」である。これは何を意味しているのであろうか。

彼は言う。「光はそれ自体として美しい。なぜなら『その本性は単一であ

5 E.de Bruyne., *Etudes d'esthétique médiévale*, vol.1-3,Bruges, 1946.本稿の「光の美学」は、Bruyneの「光の芸術学」とは異なり、「光の形而上学」を志向している。本稿の「光の美学」の学問的領野やその射程については以下を参照。拙稿「『光の美学』の射程——その歴史性とアクチュアリティ——」(清瀬みさを(篇)『カルチャーミックスⅢ——「文化交換」の美学的展開編』見洋書房、2020年所収)。

6 J.McEvoy, *The Philosophy of Robert Grosseteste.*, Clarendon Press, 1982.

7 text: Intra Text Edition, 2007, <http://www.intratext.com/IXT/LAT0496/>

り、あらゆる仕方で相互に類似しているからである』。従って、光は最高度
に一であり、そして相等性によってもっとも調和的に自らに対して相似して
いる」。この文言のうち「その本性は単一であり、あらゆる仕方で相互に類
似しているからである」の一節はバシレイオスに由来している。このような
箇所を手がかりにして、世界創造の解釈史を貫いて共有される思想から見
えてくる「光は美しい」の言説について考えてみたいと思う。

第 1 節 グローステスト『光について』

『光について』はグローステストが科学的な論考を重ねる中で最後に登場
した論文であり、「光の形而上学」としても最も重要な論考である。同種の
科学的論考としては『線と角度と図形について』『場所の本性について』『太
陽の熱について』『虹について』等が数えられる。

『光について』論文は、『諸形相の始まりについて』の標題も加わってい
る。題目だけで考えるならば、光が諸形相の始原として諸形相を生み出す如
き思想を多い浮かべるであろう。実際、具体的には始原としての「光」の働
きによって、天上での同心円の九つの物体的天球が創られ、その後、月下の
四つの天球が成立するといったcosmogony的な議論が展開されるのであり、
まさに「光」は天体成立の自然学的思想の要となっていることが明らかであ
る。その議論の冒頭では、グローステストは次のように言っている。

「『物体的有形性 (corporeitas)⁸』と呼ばれている最初の物体的形相とは、私
の見解では、光である。というのも、光は、自らによって、あらゆる部分へ
と自己自身を拡散させ、そのようにして、何か薄暗がりか遮ることがない限
り、光の起点から発して、どれほど大きなものでも光の球が直ちに生み出さ
れるからである⁹」。

8 corporeitasの語については、グローステストの教師、パリ大学のフィリップ・ル・
シャンスリエの語使用が初出らしい。cf. E.de Bruyne., *ibid.*, pp.99; pp.130.

9 *de luce*, Formam primam corporalem, quam quidam corporeitatem vocant, lucem esse

「物体的有形性 (corporeitas)」とは、「自体的に一なる実体 (substantia in ipsa simplex)」であり、具体的な物体がもっている「嵩 (dimensio)」をもたないので、原初的な「形相 (forma)」とされる。「物体的有形性」という「形相」が、如何にして「嵩」をもつものとして具体的な物体的宇宙をもたらすのかについては、説明が必要になるが、そこでグローステストは、かかる「物体的有形性」に三つの働き(operatio)を見いだす。それは、①自己の多化 (multiplicare)、②諸部分への瞬時の自己拡散 (diffundere)、③拡散による質料の拡張 (extendere) である。この働きを、グローステストは「光」のうちに見ている。こうして「物体的有形性とは光である」と彼は言ったのである。しかし、ここで問われているのは「光」ではなく「物体的有形性」である。グローステストは「物体的有形性」の概念を「光」によって説明しようとしているのである。

宇宙の成立の仕方や、その内実については措くとして、「光」の概念を用いて説明する際の「光」の意味を見ておこう。

「光は、自己の無限の多化によってあらゆる部分へと等しくされ、あらゆるところに等しく球形に広げる¹⁰」。

「光」には両義性がある。或いは「一」なるものが多化することにおける両義性である。それは、上記の引用に即せば、「多化」であるにもかかわらず「等しさ」がある点である。複数性の生起を語りながらも同一性の維持をも語る理解がある。「光」には「一」と「多」をあわせもつ意味を見いださるのである。

arbitror. Lux enim per se in omnem partem se ipsam diffundit, ita ut a puncto lucis sphaera lucis quamvis magna subito generetur, nisi obsistat umbrosum.

10 *ibid.*, lux multiplicatione sui infinita in omnem partem aequaliter facta materiam undique aequaliter in formam sphaericam extendit.

「光はあらゆる物体の形象性（species）であり完全性（perfectio）であるが、上位の物体にあるのはより氣息的で単一なる光であり、下位の物体にあるのはより物的で多化された光である¹¹」。

光は物体を多様化する。物体に形象を与えることで物体同士を区別させるに至る。そこでの区別は階層的区別であり、その物体の階層は、一と多、靈的（spiritualis）と物的（corporalis）とで構成される。こうして区別が生じたとしても、依然としてすべての物体の階層は全体として光のままであり、その意味では同質性を保っている。

「この議論において、以下のように言う人々の意図は明らかにされた。それは『万物は一なる光の完全性によって一なるものである』と『多であるところのものは、光そのものの多様な多化によって多である』である¹²」。

この引用文は、グローステストにとって、光の両義性が少なくとも古典的権威をもつ言説であることを示している。「万物の一と多」を、「光の一と多」で説明する言説は、新プラトン主義の系譜において顕著であるが、光のみで説明を徹底させたのはグローステストであろう。

もちろん思想史的には、一般的に光は精神性と結びつけられることが多いのに対して、グローステストの場合、物体性と結びつけることについては明確な方向性を示していると言えよう。このような思想はかつてなかったため、グローステストは両者の関係についていったんは問いを出している。それは、「物的有形成」は光そのものであるのか、それとも光を分有したものなのか、という問いである。このような問いは、光と物的有形成とを単

11 *ibid.*, Et species et perfectio corporum omnium est lux: sed superiorum corporum magis spiritualis et simplex, inferiorum vero corporum magis corporalis et multiplicata.

12 *ibid.*, Et in hoc sermone forte manifesta est intentio dicentium «omnia esse unum ab unius lucis perfectione» et intentio dicentium «ea, quae sunt multa, esse multa ab ipsius lucis diversa multiplicatione.» 引用元は不明だが擬ディオニシオス・アレオパギテスとも考えられる。

純に比較して差異を見る学的背景があったためではないかと思われる。光が物体よりも精神に近接的に捉えられやすいことを考えれば、物体的有形性と光とが同等であるか否かの問いは、問わねばならないものであったと思われる。しかしグローステストは「第一形相が、自分に後続する形相の力を借りて、質料へと様々な嵩を導き入れることは不可能である」として、つまり、光の自体性（per se）の意味を掬い取ることで、「光は物体的有形性そのものである」と言明する。このとき、グローステストは確信的に物体的有形性と光とを結びつけようとしているのである。

ここで我々は問うべきであろう。なぜグローステストは、形相であるとはいえ物体性と光とを結びつけようとするのか、と。もちろん、グローステストにとっても神は光であり、天使もまた光である。神や霊的存在と共に、被造物をも光を以て語ろうとすることにはどのような意義があるのであろうか。神を頂点とする階層的秩序観はフランシスコ会には馴染みあるものであるが、被造の世界を、創造者や霊的存在と、「光」として、あたかも同質的であるかのように語るには何らかの思想的動機が必要にも思われるのである。

グローステストが霊性や精神性と光との強い関連や結合を踏まえた上で、なお一層物体性と光との繋がりをも力説するのであるならば、そこにあり得る理解は、被造世界に対する肯定的価値意識ではないだろうか。これを、『ヘクサエメロン』に遡って見ることにしよう。

第2節 グローステスト『ヘクサエメロン』の「光」について

「光あれ」の解釈部分を見てみよう。グローステストは、権威を尊重する。それは多岐に及ぶ。アンブロシウス、アウグスティヌス、バシレイオス、ダマスケヌス、ベアダ、擬ディオニシオス・アレオパギテス等々であるが、中でも、アウグスティヌスとバシレイオスには負うところが大きい。

先行する多くの解釈を前にして解釈するグローステストは、議論に応じて権威を引用する。「光あれ」の箇所では、「光」で意味するものはどのような被造物なのかという解釈にて始まる正攻法をとっている。それは先行解釈の

批判でもある。

先ずは文字通りに物的な光の創造としてグローステストは理解するが、これは靈的知性的存在の創造以前に物体の創造が位置づけられていることになり、説明が困難であることから、光の字義的な意味として保留され、事柄としては天使の創造の検討へと進む。

「数多くの哲学者は、神は自らによって天使を創造し、次に天使が物体を創造し形作ったと考えていた。そして天使が創造し形作ったのは、その内にある知性的な言葉を通じてであった。こうして神は天使を通じて語ったことになろう。しかし、聖書を解釈した権威はこの解釈は否定されるべきものととらえたのである¹³」。

この問題には触れないが、神の世界創造は神の直接的全体的創造であるのか、神を起源としながらも被造物をも創造行為に関与させているのかという問題を、光の解釈に先立ってグローステストは指摘している。そこには、創造における神の計画性の問題や全能の問題が指摘され、世界創造は神自身による絶対的な創造であることが強調される。

光の字義的な意味が、それとして世界創造の言説に意義を与えていることをグローステストは重んじている。それは「光の照明によって、一日目、二日目、三日目がつくられた」からである。このときグローステストは、パー

13 Robert Grosseteste, *Hexaëmeron*, Oxford University Press, 1982, 2, 1, 1.

グローステストは、ここでアウグスティヌスも同じ問題を提起していたとして引用し、神の語りの意味を引き出す。それは、神の語り神自身からの語り神の被造物を介しての語りとに分けられ、前者の場合が、すべての自然本性に対する創造の場合と、靈的知性的被造物に対する創造と照明の場合となる。後者の靈的知性的被造物は「(創造する)言葉」や「被造」の意味を理解する力をもつが、それを理解しない場合に神の被造物を介しての語りの可能性が出てくる(『創世記逐語解』8, 27, 49)。この可能性が天使の役割であるとグローステストは見ている。従って、「光あれ」の語りは、決して天使による媒介的な語りではなく神の直接的な語りなのである。

ダヤヒエロニムスの権威を引用する¹⁴。ここには自然学的事象に関心をもつグローステストが感じられるが、しかし、六日間の創造の過程が、時間的な推移をもたず一気に (*subito*) 成立したことを、ベーダ、ヒエロニムス、バシレイオス、アウグスティヌスに従って強調してもいる¹⁵。

「光あれ」の解釈においては、いったんは字義的に物體的な光の意味を捉えつつも、グローステストは、同じ解釈の場でも、「光」の多義性を前提にして議論を進めている。

「靈的な意味では (*spiritaliter*)、光は教会と同様に或る神聖なる魂のために創られた。それは、理性的な認識能力そのもの (*ipsa rationalis cognitio*) が、空虚な思念像 (*phantasmata*) が取り払われた知性的認識 (*intelligencia*) によって、三位一体の観想へと登高するときである。或いは、知性によって知性的被造物や非物體的な被造物の理論的洞察 (*speculacio*) へと登高するときである。…また同様にして「光」は、精神の目 (*mentis aspectus*) において真理を認識することとしても理解される。光はまた精神の愛 (*mentis affectus*) において知られる真理を愛することとしても理解される…アレゴリカルな意味では (*allegorice*)、光は教会の聖職者たちや、賢者、靈的な人々である。彼等は真理の認識によって、愛によって、善行の外的な輝きによって光を与える。…光の成立 (*lucis condicio*) は樂園の恩寵における最初の親の形成である。…受洗の際でも光が成立するのは、受洗した人々が秘蹟によって主イエスキリストをまとい、主において光となるときである。…さらに光の成立は観想による真理の直視 (*veritatis visio*) である。夕方は行動へと下りてゆき、明け方は観想への回帰である。これらすべて光につい

14 *ibid.*, 2,4,1. 「ベーダとヒエロニムスによれば、この光は、最初に創造され、世界の高い部分に位置を占めることになった。それはいま太陽がおかれていた諸部分である。そして光は地球の周りを右へ西から東へと、また24時間以内に西へと戻る、それはちょうど、太陽がいま同じ間隔で毎日の運動において地球を回るように、である。光はその現前によって昼を創った。そして地球の反対側に、その影は夜を創った」。

15 *ibid.* 2, 5, 6,

て解されたことにおいて、容易に上記からわかることは、光と闇とを分割すること、それらを昼と夜と呼ぶことである¹⁶」。

「光あれ」の解釈の方法には、意味論的な位相の水準（字義的、靈的、アレゴリー的等）と共に、光において関連する別の箇所（「昼と夜」等）への言及、そして認識論や秘蹟論など多岐に亘る参照の水準がある。この意味論的位相の水準は人文科学的解釈方法として基盤となるであろうが、引き続いて現れる多岐に亘る水準群は、テキストそのものへのアプローチというよりも、「事柄」に直接アプローチすることへと人を導いてゆくであろう。多くの水準、多くの意味を列挙して行く目的は何であろうか。

多義性とは曖昧性でもある。一般的に解釈においては、多義性を多義性のままに残すことは理解の場を遠ざける。それでも多義性のままに残すことの意義があるかもしれない。グローステストがその立場に立つ者であるとして、あり得る可能性は、神の語りそのものへ接近しようとする人間的限界ということであろう¹⁷。或いは、多義性は豊かさの意義を与えることもある。短い論述のあいだで「光」から多くの意味を引き出す営みには、意味の上で「一」から「多」を引き出す積極的な姿勢が感じられるからである。「光」の多義性が「光」の豊かさを表すのであるならば、その豊かさが「光」のもつ性質自体とも関連しているであろう可能性を見積もっても問題はないであろう。つまり、意味としてだけではなく、存在としても「光」は豊かであると理解する道が開けてくるのである。

上記の、「光」の多義性を語る直前では、既にグローステストは「神は光を見てよしとされた」を挙げて、「神は、創られた光の有用性と美と秩序において喜ばれた。…今や、十全なる形象化において考えられたところのものは光であり、それは、その秩序と有用性において考えられた『昼』である¹⁸」と理解していた。神の「よし (bona)」において「光」は「美」として

16 *ibid.* 2, 9, 1~5.

17 *ibid.* 2, 6, 1. 「神による創造の偉業はとても難解であり、説明できない」と述べる。

18 *ibid.* 2, 6, 2. *vidit ergo Deus quod esset bona, hoc est, complacuit ei in lucis create*

も見られているのである¹⁹。「光」の豊かさは、「よしとされた」の解釈の場においては「美」と結びつけられるのである。こうして「光」それ自体の本性や内実への問いが始まる。「光」はなぜ「よい (bona)」のかという問いである。

「神が見たところの光の善さにおいては、光の有用性や善き使用が理解され、光は自らの自然本性的特質によって宇宙に働きかけるのだから、光の物的特質についてはわれわれはわずかしか語らないであろう。このことから、むしろ、物的な光によって神秘的に意味されている事物の特質が理解されうるであろう。光とは、本性的に自らをあらゆる方向へと多化させるものである。そして、それは、言わば、自己の実体からのある種の自己産出性のようなものである。というのも、本性的に、光は、生むことによって至るところに自己を増やし、光が存在するときには常に生むからである。こうして光は、それをとりまく場所を一挙に充たす。実際、最初の光が場所に応じて後続する光を生むが・・・(両者は同じものである)・・・²⁰」。

ここに書かれている「光」の特質は論文『光について』と内容的に一致する。「物的有形性」としての、一種の形相としての「光」である。これのうちに、グローステストは創造者の視点から有用性として、「自己産出性」

utilitate, pulchritudine et ordine.・・・Res vero que in plenitudine formacionis considerata lux est, in ordine et utilitate sua considerata dies est.

19 グローステストはギリシャ語テキストを読んでいたもので、テキスト上でbonaがκαλόνであることを知り、その影響を受けていた可能性が高い。

20 *ibid.* 2,10,1.in bonitate lucis quam vidit Deus intelligitur utilitas ipsius et usus bonus.que agit in universo suis naturalibus proprietatibus, de licis corporalis proprietatibus pauca dicamus, ex quibus intelligi valeant etiam proprietatis rerum per lucem corporalem mostice signatarum.Est itaque lux sui ipsius naturaliter undique multiplicativa, et, ut ita dicam, generativitas quedam sui ipsius quodammodo de sui substantia.Naturaliter enim lux undique se multiplicat gignendo, et simul cum est generat.Quapropter replet circumstantem locum subito; lux enim prior secundum locum gignit lucem sequentem,・・・。

の「善」を見いだしている。そして「光」は多化しても、多化の前後の各々の「光」は同質的である。

「おそらく光の自己産出性そのものは、光の自己顕現性 (*manifestabilitas*) である。光は、アウグスティヌスによれば、『物体的自然の中で最も精妙であるところのものである。このため、光は、端的に非物体的である魂に、最も近い』²¹」。

このあと、グローステストは、アウグスティヌスにならって、視覚における「見る」作用の働きへと論を進めるが、そこでも光は魂と関係づけられ、「光」は、「感覚知覚するときの魂の道具」とされる。ここで、グローステストは、物的な「光」を、物体界の中で最も非物的なものに近いものであると見る立場に立つが、この立場は『光について』において「光」に「物的有形性」という名前をもつ形相を見る立場と、逆向きの立場ではあるものの、しかしほぼ同じ解釈の傾向性を示していると考えられる。即ち『光について』において「物的有形性は光である」とする説明の仕方は、形相としての「物的有形性」を「光」によって説明するものであった。そこでは具体的な物体が成立する運動として拡散や多化の作用として「光」が語られていた。しかし、創世記解釈では、「光」を説明する中で、光が物体でありながらも非物体に近いと彼は言う。そう言いつつ、彼は光の自己産出性という動的性質や多化作用の善さを強調する。こうして、この魂に近い精妙なる物体性と産出性については典拠を示して補強しながら²²、彼は「美」に言及するバシレイオスを登場させるのである。

21 *ibid.* 2. 10, 1.

forte sui generativitas ipsa manifestabilitas est, lux quoque secundum Augustinum est id quod in natura corporea est subtilissimum; et ob hoc anime, que simpliciter incorporea est, maxime vicinum. cf. Aug. *De Genesi.*, 12, 16.

22 グローステストは、典拠として、アウグスティヌスからは「精妙なる物体性」の概念を、ヨハネス・ダマスケヌスからは「光は火の性質である (*lumen est qualitas ignis*)」を引用して「火の産出性」を示す。

第3節 バシレイオス『ヘクサエメロン』の「光」について

解釈の過程で結論的な仕方、グローステストは「光は美である」と自ら語った上で、バシレイオスを引用している。

「光は美であり、あらゆる可視的な被造物の飾りである。それはバシレイオスが言うように。つまり『光は、死すべき者らの考えが、より喜ばしいものを享受するためにたどり着けないほどの被造の本性である』。『主の最初の言葉は、光の本性を作り上げ、闇をちりぢりにし、悲しみを消滅させ、あらゆる喜びと幸福にみちた姿形/光景を一挙に生み出したのである』²³」。

グローステスト自身の表現は「光は美である」だが、この表現自体はバシレイオスの引用文には無い。その代わり「光」は被造物の中でも最も称讃される享受 (frui) の対象であり、到達しがたい喜びにみちた姿形/光景 (species, ὄψις) を示している²⁴。だからこそ「美」というのに相応しいというのであろうか。

続けてグローステストは「光の美」を自ら繰り返して言う。

「光はそれ自体として美しい。なぜなら『その本性は単一であり、あらゆる仕方で相互に類似しているからである』。従って、光は最高度に一であり、そして相等性によってもっとも調和的に自らに対して相似している。ところ

23 *ibid.* 2, 10, 2~3. lux igitur est pulchritudo et ornatus omnis visibilis creature. Et, ut ait Basileus: hec est facta natura, qua nichil voluptuosius fr uendum cogitacionem potest subire mortalium. . . . prima vox domini naturam luminis fabricavit ac tenebras dispulit, meroremque dissolvit et omnem speciem letam iocundamque subito produxit.

24 グローステストの引用は下記のバシレイオス自身のテキスト（註25参照）とほぼ同じである。

「神の最初の言葉は、光の本性を作り上げ、闇を見えないようにし、失意を解消し、宇宙を輝かせ、すべてのものに美しく喜ばしい光景をもたらした」（2.7）。

で相似の調和は美である。従って、たとえ物体的形象の調和がなくても、相似そのものによって光は美しいし、視覚に対してもっとも喜ばしい²⁵」。

文中の引用部分はバシレイオスのものである。それは「光」の一性を、そして多化のある同質性を語るものである。従って、グローステストもまた、「光」に対して、多性を含みもつ一性を語り、相等性を強調する。つまり、ここでいう「美」は、諸部分を前提にした単なる「多様の統一の美（物体的形象の調和）」ではなく、一なるものの全体美なのである。グローステストは、これに続いて、黄金の美が輝きにあり装飾を必要としないこと、星の美も輝きにあり部分の配列や釣り合いを必要としないことを例示する。

このように、グローステストはバシレイオスから「一性の美」の思想を受容していることは明らかである。「美」もまた「一性」に根拠をもつのである。

さて、同様の内容として、バシレイオスの場合を比較のために提示しておきたい。彼の『ヘクサエメロン』では以下のようにになっている。

『神は光を見て、光を美しいとした』。ここで、われわれは、この光に相應しいどのような称讃の言葉を語るができるだろうか、その光が前もって光の創造者による『光は美しい』という証言を得ているからには。さて、我々人間においては、理性は（美しいとの）判断を眼に委ね与えているのだが、そうである以上、感覚が前もって（美しいと）証言するかぎりには、それに対して理性は何も語ることはできないのである。とはいえ、もしも物体の美が、諸部分相互の均衡や表出された色の善さによってその真のあり方を得ているのであるならば、本性的に単一であり同質的である光については、どのようにして美の言葉が用意されるのであろうか。或いは、光にとっては、

25 *ibid.* 2,10,4 Hec per se pulchra est, quia eius ' natura simplex est sibique per omnia similis, ' quapropter maxime unica, et ad se per equalitatem concordissime proporcionata. proporcionum autem concordia pulchritudo est; qua propter eciam sine corporearum figurarum armonica proporcione ipsa lux pulchra est et visui iocundissima. (下線部は筆者による強調)

均衡は、光の個々の諸部分において証言されているのではなく、視覚/光景に応じた喜ばしい快において証言されているのではないだろうか²⁶。

こうして、黄金の美が諸部分の均衡によってではなく、色の善さのみによってであること、星の美が諸部分によって構成されたからではなく、輝きによってであることが例示される。グローステストが注目したのは「光は本性的に単一であり同質的である ((ἐπι) τοῦ φωτός, ἀπλοῦ τὴν φύσιν ὄντος καὶ ὁμοιομεροῦς)」の部分であり、それは「一性の美」を意味する。

そもそもバシレイオスは神の創造とその所産を称讃する言説を多く生産している教父である。

「原因のないものはない。何もかも偶然なものはない。万物は語りがたい何らかの叡智を有している。これに対してどのような言葉を表すことができるだろうか²⁷」。

「もしもあなたが動物の四肢を考えるならば、創造者が、とりとめののないものを付け加えたりもせず、また必要なものを取り去ったりもしていないことに気づくであろう²⁸」。

創造された世界は完全な作品である。バシレイオスが被造界を見ると、それを創造された作品として、全体として見ている。「光」と同様に、この

26 *Basilios von Caesarea, Homilien zum Hexaemeron*, Akademie Verlag, 1997. 2,7. Καὶ εἶδεν ὁ θεὸς τὸ φῶς ὅτι καλόν. Τίνα ἂν εἴποιμεν ἡμεῖς τοῦ φωτός ἄξιον ἔπαινον. ὁ προλαβὼν τὴν παρὰ τοῦ κτίσαντος μαρτυρίαν ἔχει ὅτι καλόν. Καὶ παρ' ἡμῶν δὲ ὁ λόγος τοῖς ὀφθαλμοῖς παραπέμπει τὴν κρίσιν, οὕτως οὐδὲν ἔχων εἰπεῖν τοσοῦτον ὅσον ἡ αἰσθησις μαρτυρεῖ προλαβοῦσα. Εἰ δὲ τὸ ἐν σώματι καλὸν ἐκ τῆς πρὸς ἄλληλα τῶν μερῶν συμμετρίας καὶ τῆς ἐπιφανομένης εὐχροίας τὸ εἶναι ἔχει, πῶς ἐπὶ τοῦ φωτός, ἀπλοῦ τὴν φύσιν ὄντος καὶ ὁμοιομεροῦς, ὁ τοῦ καλοῦ διασφύζεται λόγος; ἢ ὅτι τῷ φωτὶ τὸ σύμμετρον οὐκ ἐν τοῖς ἰδίους αὐτοῦ μέρεσιν, ἀλλ' ἐν τῷ πρὸς τὴν ὄψιν ἀλύφω καὶ προσηνεῖ μαρτυρεῖται.

27 *ibid.* 5, 8.

28 *ibid.* 9, 5.

とき世界も「一」なのである。そして「一」だから世界もまた「美」なのでもある。こうしてバシレイオスは言う。

「われわれは、目に見える事物の美から発して、美を越えたものを思い浮かべよう²⁹」。

結語

グローステストの光の形而上学の『光について』から始めて、グローステストの初期の光の思想『ヘクサエメロン』、そして教父バシレイオスの『ヘクサエメロン』における光の思想へと遡ってきたが、ここでまとめておきたい。教父とグローステストとの影響関係は明らかであるが、グローステストの中でも初期思想から展開させて「光の形而上学」をつくりあげる過程も確認できたと思われる。ここで明確にしたいのは、グローステストが、本来的に靈的存在に相応しい「光」を、被造物の中で物体に対しても適用し、その考えをおしすすめた意図乃至価値意識である。

教父から学んだことは何か。それは「光の美」の言説とその思想的意義であろう。グローステストの『ヘクサエメロン』は、その学ぶ現場を示している。

明らかに言えるのは、諸部分を前提にした調和の美ではなく、一性の美の思想を学んだ点である。これはプロティノスに始まる思想であるが³⁰、そこから教父に伝播していることは確認されている。その思想は「一と多」の視点をもつ。世界創造とその始まりを語るためには、時間的な過程に見える複数の日々の創造を、神の永遠的絶対的創造として「一」とみなす必要がある。光の照射でグローステストが強調するのは「一挙に (subito)」である。

29 *ibid.* 1, 11.

30 プロティノスにおける光の「一性の美」については以下を参照。拙稿「プロティノスにおける光と言語の形而上学」(山内志朗(篇)『光の形而上学』慶應義塾大学言語文化研究所、2018年所収)。

この視点をもつ事象は「光」のみである。「光」の照射の伝播の仕方には、確かに中心から周縁までの拡散や周縁から中心への回帰において推移や過程の時間性を意味させうるが、これを非時間的創造として「一挙に」説明するために相応しいのは、まさに「光」の概念であろうと考えられる。

「光」の概念を利用する利点は、拡散と多化がありながらも同質性（同一性）を保っているところにある。「光」の概念自体が「一と多」を含んでいるのである。しかし、それだけでは「美」には繋がらないように見えるかもしれない。「一」とすればよいのであって、とりわけ「美」に言及する必要はないからである。しかし、グローステストは教父の世界創造の偉業に対する称讃形式も学んだと思われる。バシレイオスのそれは、アウグスティヌスにも他の教父にもある教父思想と響き合う通奏低音のようなものであるが、それは被造物というよりも創造された作品を全体的に称讃する形式³¹であると言うべきであろう。創造された作品の創造過程の始原にあるのが「光あれ」の「光」なのであった。具象的な万物の生成根拠が「光」であるならば、そこから照射されて現出する諸事物も同じ「光」であろう。同様にして、万物の生成根拠が称讃に値するならば、当然、現出する諸事物もそうであろうし、世界創造における演繹的な思考も、世界肯定の思考に結びつくと考えてよいであろう。こうして、同一の光の伝播波及によって創造された世界は、全体として「一なる光の美」として称讃すべきものであるとするグローステストの「光の形而上学的美学」が成立したのである。

31 この思想形式を *pankalia*（汎美）と呼ぶ。近代のライブニッツとも共有できる、被造物世界を肯定する思想である。この被造物世界の全き肯定のためには、知性界のもつ存在性格と同様に、被造物や想像的な観念の世界にも一定の存在性格を与える形而上学的な議論が必要である。この議論全般については以下を参照。樋笠勝士（篇著）『フィクションの哲学——詩学的虚構論と複数世界論のキアスム』（月曜社、2022年）。